

小中高連携で培った価値観・態度で 地域貢献につながるグローバル課題に挑戦

高校の魅力化を目指し
学科改編と中高一貫化

大阪府北部の中山間地域に位置する府立能勢高校は、全校生徒が150人強の小規模高校だ。通学の便の問題が大きく、8〜9割は能勢町内で育つ子どもたちが学んでいる。

能勢町の中学3年生の数は現在、10年前のおよそ半数。今後の5年間でさらに半減する見込みだ。生徒数減少に合わせ、周辺では早々に閉鎖を余儀なくされた高校もある。同校の今後についてもさまざまな可能性が検討されたが、2018年度に府内屈指の進学校の分校、「豊中高校能勢キャンパス」となることが決定した。

生徒数減少に歯止めをかけることは難しかったが、同校は手をこまねいていたわけではない。学校が縮小する要因は、少子化という外的要因だけでなく、学校の魅力・活力不足という内面的問題もあるのではないかと考えた同校。この十数年間、地域ぐるみで学校の魅力化に取り組んできた。

「このままでは閉校になるのではない」という危機感もありました。それは何とか阻止しようという地域の方々の応援や卒業生の協力を受け、誰もが行きたくなる学校になることを目指し

て改革を推進しました(教頭・内田千秋先生)

校種間で情報・課題共有し
一丸となって教育改善

04年度、同校は従来の普通科・園芸科を総合学科に改編した。進学希望者に対応した「人文・理数」、グローバル社会をにらんだ「国際・情報」、福祉施設が多い地域性を反映させた「人間・環境」、これまでの伝統と施設を生かした「食・花・交流」の4系列を設置。生徒の多様な目標に対応できるようにした。

同時に、かねてより検討されてきた、能勢町立中学校2校との連携型中高一貫教育を導入。能勢町教育委員会と共に、「能勢の宝である子どもたちを学校・家庭・地域・行政が一体となって育てる」という理念のもと、「能勢を誇りに思う子・自信の持てる子・自分の道を自分で切り拓く子」の育成を目標に、小学校も含めた12年間を見通して地域の将来を担う人材育成を推進してきた。

小中高連携の土台となったのは、教職員組織的な動きだ。4月の「小中高一貫教育総会」をはじめ、小中高全教職員が集合し、協議を行ったり、各校の教育成果を共有する会合を年数

回実施。教科や生活指導、キャリア教育などのテーマごとにも定期的に集まり、情報・意見の交換を行う。各教科や総合的な学習の時間、キャリア教育について12年間を見通したシラバスを作成し、指導法の研究と研究授業などを推進してきた。

「私は数学の教員なので、例えば小学校で台形の面積の計算方法をどう教えたらいかなどについて、一緒に考え話し合います。こうやって学んできて高校生になったのだということが改めてわかり、勉強になりました。授業での生徒の見方が変わりました(教務部長・松本明美先生)」

ほか、高校教員による中学校での出前授業、高校の学びへの橋渡しとなる中学3年生対象の「土曜講習」を実施。同校プログラムの一部への中学生の参加などにより、中高の円滑な接続を図っている。

児童・生徒の交流も盛んだ。同校は広い農場設備を生かしてクリ、ブドウなどを栽培するほか、地域の小学生を対象に田植えやジャム作り体験を実施しており、高校生がその指導・サポートにあたる。毎年開催している「能勢町児童会・生徒会サミット」では、高校生徒会役員がリーダーシップをとって司

会進行し、グループ討議や全体共有を行う。あいさつ運動や、朝食メニューコン

小中高連携

地域の小学生を農場に招き、栽培管理や食品加工、動物の飼育管理について、能勢高校生が説明、指導する。



児童会・生徒会サミットでは小中高全体で共通して取り組んでいけばよいことを議論。高校生は上手に小中学生の意見を引き出した。

取材文／藤崎雅子

テストなど、共同の活動も多い。こうした年齢の異なる者が互いの状況を理解して協力する活動は、自尊感情や協調性、学習意欲などにより影響があるという。

「農場体験などで小中学生に教える立場になって、自分たちが勉強していることが改めて気付くようです。もっとしっかり勉強しなくては、と気を引き締める機会にもなっています(農場長・鹿嶋英滋先生)」



スーパーグローバルハイスクール (SGH)



マレーシア研修でマングローブ保護林や木炭工場を訪問(写真上)／フェアトレードをテーマにしたワークショップ(同右下)／来日したマレーシア高校生と人形浄瑠璃を通じて交流(同左下)



農場長
鹿嶋英滋先生



教務部長
松本明美先生



教頭
内田千秋先生



校長
向井幸一先生

グローバル教育による飛躍の
 ベースは地域で培われた

同校はさらに魅力的な学校になるため、地域の後押しを受けて、15年度からスーパーグローバルハイスクール(SGH)として、グローバル教育にも取り組んでいる。念頭にあったのはやはり「地域を支える人材」だ。
 「本校SGHで育成したいのは、国際社会で活躍する人材とともに、グローバル感覚をもって地域の活性化に貢献する人材。国際的な課題解決の事例や視点を知ることが、地域の課題解決

SGHの講座別 生徒の感想コメント

- テーマ：世界の貧困と児童労働
 「自分でできることは何もないと思っていたが、あった」「行動を起こすことが大事だと思った」
- テーマ：地域を元気にするってどんなこと?(ドイツの村の事例より)
 「この先、能勢町を生かすために何が出来るか考え、実行していきたいと思った」「小さな村でも多くのことを成し遂げられるのだなと思った」
- テーマ：アメリカの人種問題と人権
 「異文化でのコミュニケーションは難しいと感じた。が、これからはそのコミュニケーション力が必要だと思った」「相手の文化と考え方を尊重するのは大切だと思った」
- テーマ：グローバル化とローカリゼーション
 「地元のことでも知らないことがたくさんあった。今後もっと意識していきたい」「地域を盛り上げるためには、ほかの地域、ほかの国のことも知らないといけないと気付いた」

につなぐると考えています」(内田教頭)
 科目選択者によるモンゴルやマレーシアでの実態調査や課題研究のほか、「産社」総学」などを活用して全生徒を対象に「スーパーグローバル基礎知識講座」を実施。町内在住の元青年海外協力隊員や地域伝統の炭焼き師など地域の人も外部講師とし、フェアトレードや人種問題など国際問題から海外の地域おこし事例まで、多彩なテーマを学んでいる。
 こうしてグローバルな課題に取り組むなか、生徒は大きく変容しているという。SGH課題研究成果発表会では、

生徒に向けて地域の大人が本気で難しい質問をぶつけてくるが、生徒は自分たちなりの回答を返す力と自信を身に付けていた。「地域創生に取り組みたい」など明確な意思をもった大学進学者も増えた。
 「ある生徒は、人前に出ると泣き出しそうなくらい気弱でしたが、数カ月間のSGHの活動で吹っ切れたのが、年度末には生き生きと発表していました。自分を変えるほどのインパクトのある経験ができたからでしょう」(松本先生)
 こうした生徒の飛躍の背景には、地域連携によって培ってきたベースがあるからこそだと、同校は考える。

「本校には学力や学びの方向性が多様な生徒が集まります。さらに、年代だけの学校という枠を超え、日常的に多様な年代の人と協力し合うなか、『違い』で区別するのではなく、受け入れ協力し合ってきました。そのなかで自らの価値観を築き、相手を理解しようという姿勢を身に付けています」(松本先生)
 「だからこそ、フィールドが世界に広がっても異文化を受け入れ、そこから多くを学ぶことができたわけです」(内田教頭)

特色を保ちつつ
 分校として新たな連携へ

18年度から同校の「本校」となる豊中高校は、SGH校という共通点をも

Editor's Voice

少子化の厳しい環境を逆手に 豊かな学習環境を整備

少子化による生徒減の課題を抱える高校は全国に数多い。そのようななかで厳しい環境を逆にとり「地域」を軸に学校改革を推進してきた同校の事例に、勇気をもらう学校も少なくないのではないだろうか。

中高連携や地域連携といった縦の多様に加え、地域から飛び出したグローバルという広いフィールドでの多様性により、「違い」を恐れず受け入れることの価値や、協働で課題を解決していく方法を学んだ同校生徒。そして今、新たに同年代の横の多様さが加わろうとしている。これからの化学変化が楽しみでもある。

つ進学校だ。学校行事実施時や夏期休業期間を活用した交流のほか、IT技術による遠隔合同授業ができる環境整備も検討されている。分校となっても「小中高連携の取り組みはこれまで同様に継続、発展させていく」と内田教頭。校長の向井幸一先生は、同校の多様性をさらに一歩進めたいと考える。「能勢高校は縦の多様な人間関係に恵まれている一方で、狭い地域から集まる分、同質性は高いといえます。それは生徒にとっては心地よい環境ですが、もう少し不快や不満があってもいいかもしれない。それを自ら動いて改善する強さも育てていきたいと考えています」

豊中高校との新たな関係性を築き、同校はさらなる魅力化を図っていく。